

ノックアウト・ムービーズ 私をKOで打ちのめした映画



著者: Lucky Day
当コラムニスト
映画作家、元プロボクサー

Round 19

『生きる』

(1952年 黒澤明 監督)

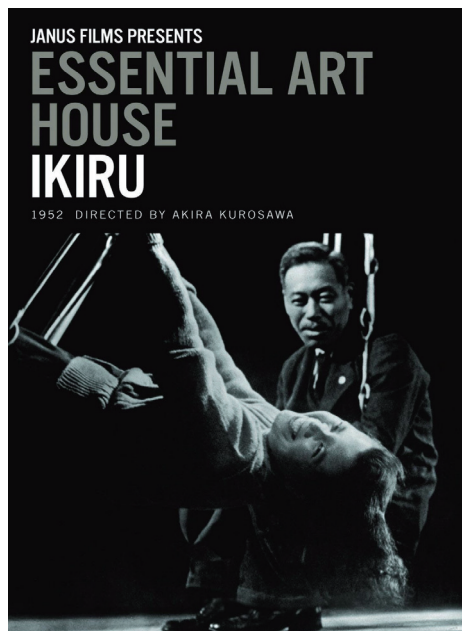


「あたしたちやあね、お前さんたちヒマ人とは違うんだよ。人をバカにしてさ。民主主義が聞いて呆れるよ」と役人にたらい回しにされた菅井金他が演じる5人のお母さん達。続いてハンコを押し続ける猫背の課長に「彼は時間を潰しているだけで、生きた時間がない。死骸も同然。意欲や情熱は少しもない。忙しい。しかし、実は何もしていない。自分の椅子を守る以外は。地位を守るためには何もしないのが一番いい」とナレーションが被さる。

同居する息子夫婦は、この課長親父の退職金を狙っている。同居する方も、させる方も「生きる」意味がわかってない、よくあるパターン。寄生虫の親にダブル寄生中。教師は、大体教師と結婚し、子どもも教師になる。それしか知らない親には、それしか知らない子どもが続き、金魚鉢から出ないタニシが子どもたちの指導役。ホラー映画より怖い。

脚本の橋本忍さん(98)にお会いしたのは10年ほど前。20代で結核を患って以来「3年以上生きられると思ったことはない」橋本さんが脚本会議初日に黒澤明監督から見せられた紙には「75日しか生きられない男の話」と書かれていた。軍隊にいた橋本さんは反戦作『私は貝になりたい』、反官僚の傑作『切腹』、差別に挑んだ集大成『砂の器』、すべてが詰め込まれたスペクタクル『七人の侍』など重々たる作品群。

「黒澤明の『生きる』が一番好き」と言うリュック・ベッソン他、世界中の映画人が絶賛の傑作はオープニングから



▲ 左から ジョージ・ルーカス、黒澤明、スティーブン・スピルバーグ

すごい。《「不平」「希望」ご遠慮なく申し出てください》が『生きる』の舞台の市民課窓口の張り紙。世田谷区役所でも15年ほど前に《すぐやる課》が登場。窓口に立つと全員が気づかぬフリ。「こんちわ」と言うコンピュータ画面にくっつくほど顔を寄せ聞こえぬフリ。会社だったら半日で倒産する運営形態だが極めて安定経営。《すぐやる課》の存在で、他の課は《すぐしない課＝何もしない課》の証明なのかわからないどころか《すぐやる課》を誇りにしている助役。丸亀市役所の部長たちは近くにある丸亀城内の資料館のソファでサボる。会議机上では仰向けに寝そべてタバコにマンガ本。吸殻入れのコーヒー缶は何ヶ月も会議室に置いたまま。全館禁煙だが議員どもはタバコ吸い放題で、あげくは女性職員に片付けさせる。職員はくわえタバコに自転車車で市内をフラフラ。着任した教育長は「教師が快適に過ごせるよう」と言い放ち「生徒のため」じゃない。決して挨拶をしない教委のオバさんは幼稚園園長に就任。新人ば無事退職金をいただけるように38年間動めます」と挨拶。高校教師は自転車泥棒。「気が利かず世間知らずで無愛想。私が市民に笑顔で接すると「過剰サービスだ」と文句を言う」と県の観光連盟で働いた人。「高校の教頭は昼寝が日課で、よく外で汚い足の爪を切ってた」「生徒のシャツやソックスの色や髪の色を細かくチェックしてキーキー、ヒステリーの中学の生徒指導教師は、自分は似合わないピンクのミニスカートにベタベタ化粧に大きなイヤリング、ネックレス、ブレスレット、マニキュア」「カナダに留学したい」と言ったら、先生は「留学して成功した奴はいないぞ」と怒った」と学生...等々。これら一目瞭然の腐りぶりは全職員が知っているはずなのに、同じ穴のムジナ共は「いや、いい人だっている！」とムキになる。社会悪を見て見ぬフリする「いい人」がいるという理論を貫く寄生虫たち。汗、涙を流す市民側の体験なしに「市民のために尽くす」なんて、ちゃんちゃらおかしい。

公務員は、100m先からも一目瞭然だが、劇中の寄生人も本物なみ。役人の空(から)いばりやズルっこさをその特異な姿勢で見事に演技する役者たちの目には「こうなったら、お終いだぜ」というシグナルが漂う。「休みを取らない理由は、僕がいなくても役所が全然困らないということがわかると困るから」というセリフも。「黒澤明は公務員だった?でなきゃ、こんなに完璧に描けんだらう」と40年間、腐り湯に浸かった元役人がうなった。わかり易い公務員をモデルにしているが、それ以外のコソ泥的でケチな「生ける屍(しかばね)人間」たちへの警告。「ラストの無数の雪のひとつひとつに疎塩を仕込んで雪を輝かせた」と照明の野島さんが教えてくれたのは2002年の夏。全映画史で44位に輝き(英『Empire』誌)、世界の名監督たちが絶賛し参考にする『生きる』は20回ほど観ても、その都度に発見だらけ。

「この映画の主人公は死に直面して、はじめて過去の自分の無意味な生き方に気がつく。いや、これまで自分がまるで生きていなかったことに気がつくのである。そして残された僅かな期間を、あわてて立派に生きようとする。僕は、この人間の軽薄から生まれた悲劇をしみじみと描いてみたかったのである」と黒澤明監督。

ある講演後のロビーで、カッカカッ!と靴音が私を追いかけて来て「警察と役所と学校に勤務して、三大腐敗場所を見ました。是非、署で講演を」と息を整えながら喋るスーツ姿の職員に会ったのは埼玉の市民ホール。「行かない。トップがゴミだから」と言う「ど、どうしてお分かりにご存知ですか?」とメガネの奥の目が丸くなる。「いい奴が昇進するわけないじゃん」と返すと「まさしくです。悪を指摘すると内輪の連中が必ず”いや、いい人だっている!”って反発されて」と、肩を落とす。「あいつらが一番コスイ。例えば”癌を見つけたから治そう”って時に”いや、他の人は健康だからいい”ってなもん。ヒガミとエゴの塊どもは、今の楽チンがおじゃんになるからえらく都合が悪い。役所と警察の100%の部署で不正経理って報道されてるけど、内部告発はゼロ。かつて”殴る教師はいっぱいた”と誰もが言い、目撃者は全国に何百万人もいるけど自首する元暴力教師もゼロ。同僚を突き出すのが正義なのに、お互いをかばい合うタニシども。つまりは、子供のためどころか、生徒を利用してのさばるハイエナ。それでも”いや、いい先生もいる”ってぬかしてる。じゃあ、2-3人、いいのがいたでしょう。だから、どうだってんだ。いい人間がいるのは当たり前だ。いい奴をベタベタほめて、悪をのさばらせてりゃいいって理屈。”いい人もいる”ってムキになる奴らは”ほとんどもは悪い”って自分で言ってるのがわかんない。講演会に招かれる連中ってのは、だいたい同類。デレデレとヘナチョコにゴマすって、また招かれて喜んでる酒のカスだ。俺は、また招かれるインチキなんかしない。絶対に嫌われることばっか言うよ。警察でしゃべったら射殺されるぜ。悪に好かれてどうする?なんでも言いなり羊の仲間入りして草や粉を食って、それで男か?社会を壊すのは政府の悪覚じゃない。悪事に何も言わない羊たち」と言う。小さくなってた大柄の紳士は「羊の署員に話してください。彼らは正義の人に会ったことがないんです。学校は、まさにハイエナ集団にやられてます」と背筋を伸ばし、目を輝かせた。



▲ 脚本家の巨匠、橋本忍さんと著者

相変わらず希望就職先は「安定した公務員」が一番人気。「市民の安定」が役目なのに、コスイワカ者がクサイバカ者ジジイどものマネをして立場を逆利用。さすがは教育水準の高い国。見事にワカ者をフネケにし、長期支配を欲しいままに。議員の連続再選を禁止し、軍隊を廃止したコストリカのように市民が賢い国と違い、幼稚な国では公務員は「先生扱い」され、あらゆる行事にデッカイ顔で、のうのうと登板。オマケに利益を上げた一般企業の特権であるはずのボーナスまで支給。税金食い職は1-3年に限定すればマシな人種が集うはずだが、「頭が悪くても、誰でもなれる。言われたまますればいい」..は公務員予備校のポスター。いかに「のさばる」から『生きる』に治療できるかが市民の質。

(Lucky Day)